

暮らしの中のメキシコ —国費留学生としての1年から

人間・社会系部門 林 憲吾 研究室 修士課程1年 樺山 菜々

4月29日(火)、迫る雨季の雨音を聞きながら、メキシコシティにて本稿を執筆しています。私は本所人間・社会系部門で林 憲吾 准教授の指導のもと都市・建築史を研究し、2024年8月よりメキシコ政府の国費留学生として当地に滞在しています。現在はスペイン語習得のため語学学校に通いながら、修士論文のテーマを構想しています。

皆さんは「メキシコ」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか？日本の友人たちからはよく、タコスと麻薬の国、と言われます。あながち間違いではないのが興味深いところですが、それ以上に、私は日々この国の文化の豊かさに圧倒されています。都市や農村での生き生きとした人々の暮らし、紀元前から続く先住民文化、そして西洋的な美しい街並みや教会まで。メキシコは当初の予想を超えて様々な表情を見せてくれる素晴らしい国です。

私が思うメキシコの最大の魅力は、都市部が発展し不自由なく暮らすことができる一方で、過度に都市化されず路上に人々の生活が溢れていることです。高層ビルの合間に果てしなく続くテント市の間を歩きながら呼び込みの声を聞く時、この国の溢れんばかりのエネルギーを感じます。もちろん経済格差は激しく治安は良いとは言えませんが、私自身は危ない思いをしたことはなく安心して暮らすことができます。とはいえ、大学や駅構内に行方不明者の情報が貼られているのが常ですから、気は引き締めて生活しています。食事については、初めは味が単純に感じましたが(脂っこい・辛い・塩辛い)、徐々に味覚が慣れ、今ではすっかり虜です。果物に唐辛子をかけるなど未だ適応できない部分もありますが、昼は外でタコス、家では日本食というサイクルで美味しく不自由なく暮らしています。

日々の暮らしで特に面白く感じるのは、外国人の

私にも「トイレどこ?」「両替して」といった声が気軽にかかることです。これは都市部だけでなく、アジア人など1人もいないような田舎町で、周りにメキシコ人がいても起こります。日本人が田舎町で同じような質問を訪日客にしている光景が想像できるでしょうか？相手が誰かをあまり気にしない国民性が理由のようですが、この肩肘を張らなくていい雰囲気は、移住者として非常に有難く、日本でも見習いたい部分だと感じます。ちなみに、逆にこちらが質問すると間違った答えを自信を持って教えてくれるのが常ですから、3重のチェックが必須です。そうした部分にも日々メキシコらしさを感じています。

そのほか、私が最近魅了されているのはメキシコの先住民文化と68に及ぶその多様な言語です。メキシコは約500年前にスペインに征服され、現在では国民の8割以上がカトリック教徒です。しかし先住民文化は失われたわけではなく、時に西洋文化と融合しながら今日に至るまで存続しています。地方の村を訪ねると、住民同士の会話が先住民言語で行われているのは当たり前で、車で30分の隣村と言葉が通じないことも珍しくありません。そうした文化の多様性に触れるのが楽しく、最近は研究調査も兼ねて各地の遺跡や教会などを巡り、地域独特の祭りになどにも積極的に参加しています。

本稿では専門の建築や研究に関してほとんど触れないままになってしまいましたが、右も左も分からないまま飛び込んだメキシコでの生活も残すところあと3ヶ月となりました。この1年間の経験は私の都市と民族多様性に対する視野を大きく広げてくれましたし、日本での生活を振り返る良い機会にもなりました。帰国後はこの経験を糧に修士研究に邁進したいと思います。



メキシコシティのティアングス(テント市)の様子。
規模によっては数キロに及ぶことも。



チアパス州テネハバ村の祭りにて、
自家製発酵飲料チチャを振る舞ってもらった筆者。